

たとえば、青い空と海の、そのさかいめを見いだそうとするとき。

どこからともなく降りつもる雪の、そのはじまりを見極めたいと宙をあおぐとき。

私の胸の奥でなにかが羽ばたくのが感じられます。まるで私の心ごと、ここから飛びたとうとするかのように。私の足は少しも地面を離れることはないのに。

だからでしょうか。

朝。雨あがりの庭でそれを見つけたとき、私はすぐに「舟にのせてやろう」と思いました。

この季節になると、私たちはいつも川べりの草を摘んで舟をつくります。そこに小さな花や灯りをのせ、願いをかけて岸から流すのです。

見つけたのは、蝶のさなぎでした。風にふり落とされたのか、緑のさなぎは露にこごえていました。私はできるだけきれいな草を選び、舟をつくってやることにしました。まだ朝露にぬれた草を編みながら、私は考えていました。子どものころからこれまで、いったいいくつの草舟をつくり流してきたことか。けれど、それらにどんな願いをかけたかは、不思議と思いだせないのです。

かすかな記憶の糸をたぐり、たどるうち、私はいつの間にか眠ってしまいました。

夢のなかで私は白いやわらかな繭のなかにいました。記憶の糸がからまりあい、ついに繭になってしまったのだと想いました。やすらかな、満ち足りた眠り。それを解いたのは胸のなかから聞こえてくる小さな羽音でした。それを合図に、からだは少しずつ透きとおっていきます。

「さなぎから蝶になるときは、最後のときに一度透明になる」と、いつか言ったのは誰だったろうと、私はおぼろげに思っていました。すっかり透明になってしまうと、今度は背中の殻が開き、からだは少しずつ外へと押しだされていきます。

こうしていつしか私は一羽の蝶となり、草舟に揺られているのでした。

岸をはなれた舟は、さざなみに身をふるわせながら、音もなくすすんでいきます。

水の流れにあわせ白い羽根を動かすたびに金粉がぱっと散るのが、我ながら美しく思えました。見れば岸には大勢の人が身を寄せ合い、それぞれの岸から草舟を流しています。あんなにたくさんの舟にいったい何をのせているのだろうと、私は羽根がかわくのをまって、川の上を飛んでみることにしました。

空から見下ろすと、そこには小さな銀河がありました。不思議なことに灯りをともしている舟もそうでない舟も、どれもが灰白く光っているのです。光る川に目をこらせば、私の舟を見いだすこともできました。そこには、透明な炎をあげるもの。わたしの願いもありました。それに触れたいと身をのりだしたとき――

私は草の舟と指を結ばれたまま、いつもの縁側に座っていました。空には、虹がひとつ。

さなぎを手にとり空に透かしてみたとき、私はあることに気づきました。

言葉はひとりで、うまれてきました。花のように。詩のように。

「飛んでおいき。好きなところへ。なりたいものに、なれますように」